HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	動的文脈論再考
Author(s)	加藤, 重広
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 128, 195(左)-223(左)
Issue Date	2009-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38830
Type	departmental bulletin paper
File Information	128_006.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北大文学研究科紀要 128 (2009)

動的文脈論再考

加 藤 重 広

本論では，加藤. 2006a，2006b，2008a，2008b などで主張した「動的な語用論」の枠組み，特に，動的に文脈を設定する考え方について再検討を加える。

１．動的語用論とは？

一般に，動的（dynamic）というと，形式意味論のうち，動的述語論理（dynamic predicate logic; DPL）をはじめとする動的意味論（dynamic semantics）を強く連想させるかもしれない。また，Kempson et al. 2001 などの動的統語論（dynamic syntax）も系統的には形式意味論の流れにあると見てよいのならば，dynamic を形式意味論的な基盤を持つ研究の別名と理解することは，じゅうぶんあり得る。

しかし，ここで言う動的語用論（dynamic pragmatics）とは，基本的に，加藤. 2006a，2006b で言う線条的語用論（linear pragmatics）を拡張した枠組みに対する名称であって，①発話が時間軸上に線条的に展開する特性を重視する，②発話の産出と発話の解釈が必ずしも鏡像関係をなさないという前提に立つ，という特徴を持つ(加藤. 2008a，2008b)。もしも，加藤. 2009b で想定するように，マクロ語用論の一領域を立てるのであれば，心理語用論(psychopragmatics)との親縁性が強いと考えられる。これまで，心理言語学における文理解（sentence comprehension）は，構造の解釈・再解釈に力点があったと思われるが，その発話解釈に力点を置くことでこれまで扱われなかった（あるいは，十分に検討されなかった）側面を扱うべき領域として心

理語用論の意義を認めることができる。

「動的語用論」は，以上述べたように，心理語用論における一つの流れとして創案されたものであって，形式意味論を意識した枠組みではないが，全く共通点を持たないわけでもない。とは言え，「動的(dynamic)」が通常表す象徴的な意味合いを考慮すると，「動的語用論」という名称は misleading であり，妥当ではないと見る立場もあることだろう。ここでは，暫定的に「動的心理語用論（dynamic psychopragmatics)」とすることで，方向性を明確化することを考えたい。

さて，上述の①の特徴は，発話や，発話を構成する文が未完成の段階でも，聴者が解釈を開始していると見れば，文理解が一義的な経路で完成するのではなく，選択と修正を何度も含みうる可能性を考えなければならないことを示す。また，②の特徴は，動的心理語用論が，話者と聴者のあいだに見られる認識のずれも捨象することなく，解明の対象に含めることを示している。

例えば，袋小路文 (garden-path sentence) などにおける修正解釈のプロセスが成立するためには，文の構造的な理解が確定するまでは，解釈者が短時間であれ，一時的に受け取った言語データを保持しておくしくみがなければならないと考えられる。また，文脈指示が成立するためには指示対象を含む文脈をどこかに蓄積しておくしくみが必要だと考えるのが自然であろう。情報を保持・蓄積しておくしくみを，以下で記憶と呼ぶとすると，記憶をどう語用論と関連づけて整理するかが重要になる。

1.1　動的心理語用論と記憶モデル

認知心理学で記憶を短期記憶（short-term memory; STM）と長期記憶（long-term memory; LTM）に分けることは一般に行われていることであるが，実のところ，両者の機能や構造が心理学において必ずしも一義的に確定しているわけではなく，言語学，とりわけ語用論の研究に利用できるかどうかは検討を要する。認知心理学では，変異はいろいろ見られるが，記憶を 3 分類し，感覚器における瞬時の記憶たる直接記憶（immediate memory）に《短期記憶》と《長期記憶》を加え，おおむね以下のように理解をすることが

多いようである。

刺激は，感覚器に瞬間的に保持され，これを感覚記憶ないし直接記憶と呼ぶ。更にそれは短期記憶に転送され，その一部が長期記憶に転送されて，恒久的に保蔵される。

記憶に 2 種類の部門を想定する考えは，James. 1890 の primary memory と secondary memory からはじまり，20 世紀半ばから，電気信号の伝達である前者と神経細胞間の接続である後者という区分も提案され，前者を短期記憶，後者を長期記憶とする区分が一般化したという。その後，短期記憶を短期記憶庫と見る静的なとらえ方を批判して，作業記憶あるいは作動記憶（working memory）と見なす概念が提案された（Atkinson and Schifrin. 1968, 1971）。記憶という荷物の置き場として場所の比喩で捉える前者にたいして，後者では処理的なプロセスないし理解のしくみとして動的な機能に見立てているということが言えるだろう。

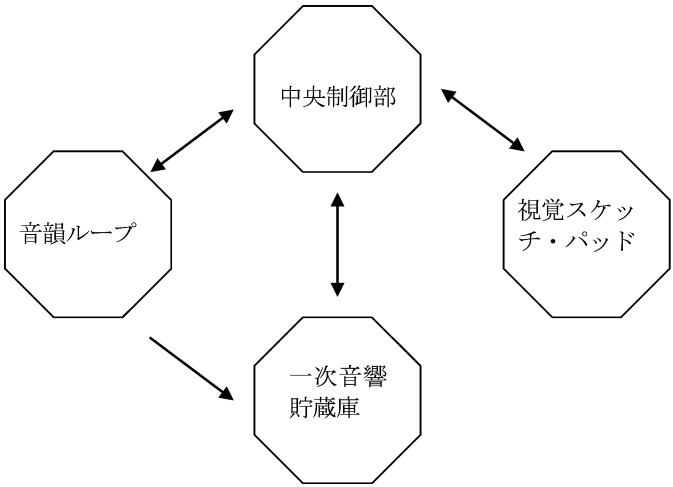
さらに情報工学の進歩に伴い，情報処理プロセスとして手順化して理解されるようになり，ある短期記憶仮説では，central executive（中央制御部）とその属下にあるスケッチ・パッド（sketch pad）[1] と音韻ループ（phonological loop）[2] が作業記憶を構成しているとされるが，Salame and Baddeley. 1982 では，これに一次音響貯蔵庫（primary acoustic store）を加える提案がなされ，4 つの要素からなる作業記憶を想定するようになった。

音韻ループは，「内なる声」とされ，一次音響貯蔵庫は「内なる耳」，視覚スケッチ・パッドは「内なる目」と説明されている。言語学的に見ると，音韻ループと第一次音響貯蔵庫が，音韻部門と音声部門という分け方になっていない点，音韻ループだけが一義的に発声のためのものである点，形態処理と意味処理に関する部門が欠けている点などが，問題となる。以下の図は，Eysenck. 1986 を参考に引用者が簡略化したものであり，言語処理の観点か

[1] あるいは scratch pad，visuo-spatial scratch pad，visual-spatial sketch pad などとも表現されている。ここでは「（視覚）スケッチ・パッド」と訳している。

[2] あるいは，articulatory loop とも表現されている。訳語には，「音声ループ」「音韻ループ」が混在している。

ら示唆するところも少なくないものの，言語学的な基盤に合わせて調整し直す必要もあるので，次節でその点について検討する。なお，短期記憶については，このほかに有意味性（meaningfulness）を「処理の深さ」（depth of processing）と見る考えなどもあるが，ここでは触れないでおく。



長期記憶についても，陳述的記憶（declarative memory）[3] と手続き的記憶（procedural memory）という区分が立てられている（Anderson. 1980）。出来事や知識の記憶である前者に対して，後者は運動技能や習慣に関わる身体的な記憶である。さらに，陳述的記憶は，意味記憶（semantic memory）とエピソード記憶（episode memory）に区別され，近年いくつかのデータからこの区分が重要であることが確認されている。

言語学的に見ると，陳述的記憶とは，文の形式をしており，文法論で言う大まかな「命題」としての内容を備えているものと見ることになるだろう。とは言え，統語的また意味的に「節（clause）」をどのように認定すべきか，

[3]「宣言的記憶」という訳語も見られる。また，「認知的記憶」（cognitive memory）と呼ばれることもある。

には多くの議論がある。エピソード記憶を意味的に１つの節を含む命題[4]と見るならば，これは，加藤. 2003 が「テンスを持つ」と呼ぶものにおおむね相当する。一方，意味記憶は一般に「ＸとはＹという属性を有する」とまとめられるようなもので「テンスを持たない」形式を典型と見ることができる[5]。

意味記憶は「知っていること」の内容で世界知識の集積であるが，エピソード記憶は「覚えていること」の内容で特定時に特定の場で生じたできごとに関する記憶の集積である。エピソード記憶は人間に特有のものであるのに対し，意味記憶は人間以外の動物にも見られると考えられることが多い。言語は，人間の場合，いずれの記憶にも深く関わることが多いが，言語がなくてもいずれの記憶も成立しうると考えられている。

また，近年，主に長期記憶において，記憶しようという意思のもとで記憶する explicit memory と，無意識のうちに記憶してしまう implicit memory を区別することが行われ，神経心理学的な実証も継続的に提示されているようであるが，本論では扱わない[6]。

手続き的記憶は，一般に身体的に手順として記憶されたものを指し，一見すると言語使用には関わらないように見えるが，無関係というわけではない。例えば，特定の語形の言い間違いなどは，一種の混交（contamination）であるにせよ，別の語形による置換であるにせよ，不完全な自動化による失行と見なせるので，広義の動的心理語用論のテーマとして研究することは可能だ[7]。

---

[4] 従って，文法化した要素などによる形式上の節は除外される。

[5] ここで言う「テンス」とは，統語的カテゴリーとしての「時制」と同義ではない。例えば，「太郎はかつて一度ドリアンを食べたことがある」は，過去の一時点のできごとと見て「テンスを持つ」とするのではなく，「太郎は，ドリアンを食する経験を有する」と読み替えることで，属性をテンスフリーで表していると考えれば，「テンスを持たない」ことになる。

[6] なお，以上の記述には，既に触れた文献以外に，浮田・賀集.（編）1997，苧阪. 2002，田中・橋本. 1999，中條. 2001，村井・濱中. 1999，吉益. 1999，Wilson and Keil. 1999 などを参観している。

[7] 例えば，「新春新人シャンソンショー」を「新春新人シャンションショー」とするような

動的心理語用論では，解釈の処理プロセスに関わる記憶種を区分し直し，さらに，そこに収蔵される情報を文脈として整理しなおすことによって，発話を単位として行われてきた語用論的分析とは異なる分析が可能になると考えている。

1.2　言語学から見た記憶種別の再検討

短期記憶（short-term memory; STM）は，作動記憶（working memory）[8]と同一視され，両者を単に観点が異なるだけで指示対象が全く同じものに対する呼称と扱うことも珍しくない。山下. 1999 では，当初「注意」に重点があった「短期記憶」の概念が「作動記憶」では下位システムを持つ情報保持の機構と理解されるようになったとしている。音韻ループは，音声的な情報をそのまま 2 秒程度保持しているだけとされている（山下（ibid.））。当然のことながら，STM が LTM との保持時間の差異に着目しているものであるのに対して，作動記憶という捉え方は，処理プロセスの特性に着目しているものだと言うことができる。以下では，この点も踏まえて検討を加えたい。

言語学から，これらの記憶モデルを見た場合，いくつかの言語学的な知見と原理を考慮に入れたモデルにする必要がある。もちろん，知的処理において言語が関わるのはすべての局面ではなく，記憶のシステムの全体に関わるとも言えないが，一般言語学と一貫性を持ちうるモデルを考えてみたい。そこで，まず言語学的に考えて，情報の保持がどのようなものでなければ，合理的な記憶システムと見なせないかという観点から，以下 6 点を指摘する。（以下の論点そのものは，おおむね，加藤. 2006a と同じものを含むが，順序と記述には異なるところがある。）

⑴　知覚した言語音から音素を抽出するには，音韻体系に関する言語知

発音の間違いなどは，子音を揃える自動化による失行と見ることができる。もちろん，すべての失行に自動化が関与するわけではなく，現象を先ず整理してから要因を特定する手順が必要になる。

[8]「作業記憶」あるいは「ワーキングメモリー」といった訳語も用いられる。

識を参照する必要がある。ただし，実際の言語音から音韻レベルでの確定がなされるには，形態素・語彙に関する知識や世界知識の参照が必要な場合もある。

(2) 音素の連続から形態素を抽出するには，語彙に関する言語知識を参照する必要がある。ただし，実際の音素連続から形態素を正しく抽出するには，世界知識の参照が必要な場合もある。

例えば，[sæego] という音連続 (sæ/e/go がおおむね等時的で，3 モーラに聞こえるとする) を耳にした場合に，「サエゴ」という単語形を抽出するにしても，日本語母語話者が通例持っているレキシコンに「サエゴ」という項目がないのであれば，そのまま形態素として抽出することにより，失行が生ずる。これが「サエゴ」ではなく，「サイゴ (最後)」だと修正解釈するには，①レキシコンに「最後」があること，②話者が母音を明確に発音しない癖や明確に発音できない状況にあること，③ [sai] という 2 モーラ 1 音節の音連続において，[a] という母音の口の開きが足りなければ [æ] のように「エ」の音色を伴った「ア」のように聞こえること，④同じく [i] という母音の発音において口の閉じ加減が不十分であれば「エ」に近く聞こえること，⑤東日本地域の口語では，文体レベルが低くなると，[ai] という二重母音 (2 モーラ 1 音節) が融合し，[e] という長母音 (2 モーラ 1 音節) になること，⑥前後関係 (後述の「形式文脈」における直前部と直後部のこと) から，「最後」という単語が適当だと判断できること，などの知識がなければならない。

私たちは，通例，発話を行った相手が無意味な音連続を発するわけがない，と考えており，相手の発話が解釈可能なものであるという原則があらかじめ成立することはコミュニケーションにおける最低限の必要条件である。これは，原則 (principle) と言うよりも，公理 (axiom) に近いものとして位置づけておくべきだと考えられるので，暫定的に《解釈合理性の公理》(axiom of rational interpretability) と呼んでおく[9]。

[9] 数学的な厳密さで「公理」と称するべきかについては，別途検討を加える必要性がある。

上掲の知識のうち，②は，人間の行う発話には不完全さが含まれうるという経験知識である。③④⑤は，Xに類似するX'という形式をXに復元するための知識である。①は，該当の形式を事前にレキシコンに持っているかどうかということで，長期記憶に収蔵している言語知識の一部をレキシコンがなすことから，レキシコンに持っているかという所有の有無（…①a）ということと，当該形式が使える状態にあるかという利用可能性（…①b）に分けて考えることが可能である。⑥は，ある単語形が妥当であること，あるいは，いくつかの候補から選び取られるべき最適な形式であるという判断であるが，この種の判断が常に単一の理由で導かれているとは考えられない。いくつかの根拠から総合的に判断されることも考えておくべきであろう。この点については，またあとで触れることにする。

さて，記憶モデルの言語学的な再検討に戻ろう。

⑶ 音韻処理されない言語音のままで長時間保持することは，特別な注意を継続的に向けなければ，困難である。相手が発した「あのね」という談話標識[10]のアクセントやイントネーション，また，パラ言語的特徴をそのまま（録音しておくかのように）保持しておくことは，私たちにとって，大きな知的負担となる。相手の言語的特徴を（ものまねするように）記憶に保持しておくことは不可能ではないが，一般に時間が経過するにつれて，保持は損われ，情報が不完全になることが想定される。また，保持すべき情報が追加されるなど負担が大きくなると同様に保持が不完全になることが考えられる。

⑷ 発話の解釈処理がなされた後は，言語音のままで当初捕捉した情報

また，本論は特に「公理」という呼び方に拘泥するものではないので，数学における定義と同じものとして「公理」と呼ぶべきでなければ，混乱しない名称を創出するべきだろう。

[10]「あのね」は，指示連体詞の「あの」に間投助詞の「ね」が後接した形式であるが，ここでは談話上の標識的機能を有すると見て，談話標識に含めておく。談話標識については，加藤. 2001a，2001b を参照されたい。

を保持しておく必要はない。解釈が一旦確定すれば，未処理のまま長時間保持するという負担から解放される。例えば，[sæego]という音連続は，それが「最後」という単語形であることが判明すれば，捕捉した言語音のまま保持する必要はなくなる。音素以前の言語音のままの形式に比べて，形態素という離散的要素のレベルや意味的なレベルでは保持の負担が小さいと考えられる。

日常のやりとりの中では，相手が，言い間違えたり，変わった話し方や不正確な発音をしたりすることもある。それがきわめて特徴的で興味深ければ，私たちはそれをなるべく正確に記憶しておこうと意図して保持につとめることもある。しかし，文字で記せば「あのね」でしかないような談話標識も，イントネーションやアクセント，調音時間の長さや高さ，声の特徴などまで正確に保持しようとすれば，相応の知的負担が生じる。言語音としての保持の負担を効率的に減少させるには，より重要な特徴だけを残し，相対的にそうでない特徴は捨象していくという方法が考えられるが，ほかに，メタ情報を言語的に付すことで特性の保持を代替するという方法があるであろう。前者は，声の特徴やイントネーションなど相対的に重要と思われる点を残し，それ以外は正確な保持を放棄することなどがそれにあたり，やり方によっては当初の言語音をデフォルメすることで保持することにもなる。後者は，「あのね」を形態素レベルにしてしまい，それに「まるでおじいさんのような口調で言った」あるいは「○×弁のようなイントネーションで言った」というメタ情報を付すという方法である。これは，前者のやり方と違い，情報全体が言語形式化しているために保持しやすく，検索や再利用が容易という特徴がある。

また，言語音としての保持は，離散的単位として処理できないことから感覚器に近いレベルでの保持が必要となる。私たちは数秒程度なら録音するように他者の発話をほぼそのまま保持することは可能であるが，同じことを数分の長さでできるかというと，現実的には非常に困難であることを経験的に知っている。このことは，言語音は入力の段階では，保持に向かない連続的

な状態にあり，記憶システムのなかではその負担の大きさから保持できる量に限りがあるということを示している。言語処理の観点から記憶システムを捉える時，より保持しやすい形にして，つぎの段階に送り込むという流れを想定することが必要になる。

さて，問題点として取り上げるべきものとしては，さらに以下の 2 点がある。

(5) 発話のやりとりを円滑に進めるには，解釈処理済みの情報をやりとりが終わるまでの間保持しておく必要がある。ここでいう「解釈済みの情報」とは，当初捕捉した言語音が抽出処理(アブストラクション：音韻処理・形態処理・統語処理・意味処理などの一連の処理)を経て，保持すべき状態になっている意味内容を指しているが，やりとり（＝セッション）が続く限り，解釈済みの情報が保持されていることが会話参加者の義務である。セッションが終了したあとは，解釈済みの情報は，保持する必要がなければ世界知識に組み込まれることはなく，保持する必要があれば世界知識に組み込まれ，長期記憶の一部をなすことになる。

(6) 発話の解釈には，言語知識だけでなく世界知識も参照する必要がある。ここでいう世界知識は，レキシコンなどの言語知識とは異なるもので，長期記憶に収蔵されているものである。世界知識は，不断の更新がなされるもので，開かれた知識体系であり，原則として体系としての合理性が保たれ，一貫性が崩壊しない必要がある。一方，言語知識は，言語習得期までは開かれた知識体系であるが，徐々に閉鎖性が強まり，世界知識ほどの柔軟性がない知識体系となる。

処理が済んだ後に，処理前のデータと処理後のデータの両方を保持しておくことは，再度処理をし直すこと[11] が容易になるという意味では意義がある。

[11] ここでいう「処理のし直し」は，最初の処理後データをすべて放棄して，完全に処理を

しかし，有期の記憶に容量的な限度が考えられること，保持停止の時点をほかに設定しにくいこと，処理のし直しが発生する頻度に対して保持する情報量が大きくきわめて非効率なしくみになること，などを考え合わせると，一旦処理が済んだ時点で保持状態の指定を解除すると考えておくべきである。再解釈に必要なデータの復元や遡行的推定は解釈後のデータからでも可能な場合が多い。例えば，先の［sæego］という言語音を「最後」という語形に解釈したあとは，この言語音をそのまま保持することなく放棄してもよいことになる。しかし，当初の言語音を保持していない状態になって（要するに，忘れてしまい，正確に覚えていない状態になって），「最後」と思った語形が実は「生後」の聞き間違いであったと考えれば，/saigo/と/seigo/は形態が類似している[12] と遡行的推定を行うことも可能である。

未処理の言語音声を音韻レベルへ，音韻レベルを形態レベルへ，形態レベルから構造を確定する統語レベルへ，文構造から発話意味を確定する意味レベルへ，それぞれ次のレベルに処理が進むことをここでは抽出(abstraction)と呼ぶ。ここでは，伝統的な言語学の知見も踏まえて，音韻・形態・統語・意味という 4 つのレベルを暫定的に想定するが，実際の処理は最終的な出力形が得られればよいので，必ずしも順次処理を行う必要はないと考えられる。但し，ここではモデルとして理論的な基盤を構築するための試みを行っているので，心理学的な知見とのすりあわせや，いくつかの言語理論との異同については機会を改めて検討する。

次に，「セッション」（session）という用語についても，簡単に確認してお

再度行うことであり，統語処理途中での再分析（re-analysis）などは含まない。再分析などは，処理が完全に終了しない時点（まだ処理動作中の段階）でさかのぼって部分的に処理を再度行うことであって，すべての処理をリセットして新たにやり直すというものではない。

[12] 東京方言では，「生後」はおおむね［se:go］のように長母音化する母音融合現象が起こること，［g］は伝統的にはいわゆる鼻濁音として軟口蓋鼻音で実現するものであること，東京式のアクセントでは頭高の「最後」に対して「生後」は 2 モーラ目から高くなり，アクセント型が異なること，など現実的はさらに考慮すべき点があるが，ここでは論点の例示であり，議論を簡略化するために触れていない。

きたい。ここでセッションと呼ぶのは，やりとりの開始から終了までの言語行動の全体である。もちろん，実際の分析においては，どの時点を開始と見なすか，どの時点を終了と見なすかといったことに厳密な定義が必要な場合もあるであろう。本論では，実際の会話分析の方法論的基盤にそのまま用いることは想定していないので，今後修正する余地を残しつつ，以下のように考えておきたい。

(7) セッションとは，「やりとりの開始から終了まで言語行動の全体」であり，最初の発話開始点をもって始まり，最後の発話終了点を持って完了する。セッションが開始してから，話題が転換するなど，一連の発話を内容と一貫性と統合性などの観点からより小さい単位に区分することも可能であり，セッションの内部におけるより小さい単位をパラグラフ(paragraph)と呼ぶ。１セッションは１つ以上のパラグラフから成る。

短いセッションは１つのパラグラフがセッション全体をなすこともある。パラグラフの境界部には「ところで」などの談話標識が現れることが多いが，これはまた別の機会に論じたい。また，「パラグラフ」といっても，文章論における「段落」とは同じでない。「段」と言うこともできるかもしれないが，当面「パラグラフ」と呼ぶことにしたい。

セッションは，二者の会話のみに適用されるわけではない。文章を読む場合は，読み始めから読み終わりまでの読み手の動作が１セッションをなすことになる。

２．文脈と記憶モデル

次に前節までの検討に合わせて，文脈の種別を考えたい。

2.1 形式文脈

まず，(5)に言うような，会話のセッションの間保持されなければならない情報がある。これは，いわゆる言語形式を用いて情報化された文脈である。これは，単純に見れば，発話の蓄積であるが，言語形式を用いて顕在化されたものであるところから，**形式文脈**（formal context）とここでは呼ぶことにする。

形式文脈は顕在的なもので，会話参加者が共有していることが前提（加藤 2006b）であるが，時間軸上の基準点以降に存在しうる形式文脈を理論上想定することが可能であることから，形式文脈は潜在性の観点で機械的に二分することができる。時間軸上の基準点以前に言語化された**顕在的な形式文脈**（actual formal context）と基準点以降に言語化され（う）る**潜在的な形式文脈**（potential formal context）をここでは想定する。

例えば，ＡとＢの二人が会話していて，Ａが「僕は風邪を引いていて体調が悪いんだ」と言ったとすれば，二人のセッションが終了するまで，この情報は保持されなければならない。一般に，自分についての情報を披露したＡがこの情報を失うことはないが，聞き手として情報を得たＢも原則として保持していること，忘れないことが求められる。万が一，この発話を受容しておきながら，数分後に，Ｂが「君，体調が悪そうだね。風邪でも引いているんじゃないの？」とＡに言ったとすれば，形式文脈をセッション参加者が共有保持するという義務（＝**形式文脈共有義務**，加藤 2006b）に違反することになる。セッションの形式文脈とそれに関連する状況文脈などが収蔵される記憶領域を「談話記憶」（discourse memory）と呼ぶことにしたい（後述）。

潜在的形式文脈とは，時系列上の相対的関係に基づくものである。

(8) Ａ「晩ご飯でも一緒に食べないか？」［*］
Ｂ「申し訳ないけど，犬を病院に連れて行かないといけないんだ」［**］
Ａ「そうか。じゃ，また今度にしよう」

このやりとりにおいて，Bの発話は上にあるような形式文脈として表すことができるが，［*］の時点ではまだ実体化していないので「潜在的」であるが，［**］の時点では「顕在的」と見ることになる。

また，Bが犬を飼っていることをAが知っている（＝セッション開始前から知っているので世界知識に含まれていることになる）のであれば，［**］の時点で「Bは今夜犬を病院に連れて行く必要があるので，Aと夕食を一緒に食べることはできない。BはAの誘いを断る意思を明示しており，そのことを申し訳なく思っている」という程度の意味しか引き出すことはできない。しかし，AがBが犬を飼っていることを知らない（＝Aの世界知識に持っていない）のであれば，「Bは犬を飼っている」という推定を行うことになる。Bが真実を語っているのであれば，Bが病院に連れて行くべき犬が存在するという存在論的前提は成立する。しかし，その犬をBが「飼っている・所有している」とは限らない。これは，推意と同じように取消可能な推論である。いずれにせよ，この場合，Aは［**］の時点で新たな想定を談話記憶に加えることになるが，この「Bは犬を飼っているようだ」という命題は，形式化されていないので，これは形式文脈に含まれない。以下では，この新たな想定を派生的なものとして扱うが，談話記憶に収蔵されるにしても，形式文脈の定義からは逸脱してしまう。ここでは，言語形式化したものだけを形式文脈としているが，関連性理論で言う表意（explicature）に整理したレベルで形式文脈を設定することも考えられる。この点は今後検討すべき問題点となる。

2.2　世界知識

⑹で言う「世界知識」とは，セッションが始まる前から存在している記憶で，いわば世界に関する知識の総体である。また，語彙や統語規則に関わる「言語知識」もセッションが始まる前から所有されている記憶の一部となっているが，システム上両者は区別される。ただし，言語知識の一部に世界知識が組み込まれていたり，世界知識の保持に言語知識が関わっていたりすることが考えられ，両者は相互作用を行う関係にあり，分断されているわけではない。ただし，モデルとしては区分しておく。世界知識は個人ごとに異なる

が，多くの人間が共有している知識も少なくない。なかには，言語によらず共通している知識もあるであろう。また，世界知識は個人においても常に更新し続けているものであるので，同一のまま留まるわけではない。時間の経過とともに，変化の度合いは個々のケースで異なるにしろ，変わっていくものであり，評価する時点が異なれば同一個人の世界知識であっても同一ではないと考えるべきである。

この「世界知識」のとらえ方は，人間として共通する普遍的知識（例えば「生き物は死ぬ」など）から文化的知識などいくつかのレベルの共同体で共有される知識，家族など小規模の共同体でしか共有されない知識，本人しか知らないような知識とトップダウン的に設定していくやりかた（イーミックなとらえ方）もあるであろう。しかし，本論は，エティックに世界知識を捉えてボトムアップ的に設定する方法論をとり，まず，「世界知識は個人が持つ，世界に関する知識の総体である」とし，「そのなかには共有されているものも共有されていないものもある」と考える。共有のレベルで分けて階層化することに意味がないわけではないが，特定個人しか知らないことが急速に多くの人が共有する知識に転じることもあり，共有度を過度に重視すべきではないと考えるからだ。「世界知識とは（すべてが共有されているわけではないという意味で）個人的なものである」と言ってよい。

さて，発話の意味解釈を十分に行うには世界知識と言語知識の両方が必要である。「世界知識」も「言語知識」も，新しい情報がもたらされることによって，知識が拡充されたり修正されたりすると考えられ，常に更新されうると見られるが，言語知識には一旦習得してしまえば統語規則のように新たな追加が通例行われないものもある。また，世界知識と同じように，個人ごとのエティックな知識として言語知識を想定すると，我々は言語習得の臨界期を過ぎても少しずつ語彙を拡充して行くことが多い。しかし，常に語彙習得を行いながら言語知識を更新しているとまでは考えにくい。つまり，言語知識を，完全に硬直化して追加も修正もできないものと見なす必要はないものの，世界知識のように不断に更新されていると考えるべきでもないということになる。言語知識は，世界知識が完全に開放系であるのに対し，領域によって

異なるもののおおむね閉鎖性が強く，語彙体系などある程度の開放性が認められるところもあるが，統語規則など閉じた体系になっているところもある，と見ておくべきだろう。これらの知識のある場所をここでは暫定的に「知識記憶」と呼んでおく。

このほかに，「感覚記憶」に相当する領域があってもよいであろう。言語の記憶モデルにはその設定の有無が大きく関わるとは考えにくいので，ここでは含めないが，追加しても枠組み全体に矛盾を来すことはないと思われる[13]。

2.3　3 つの領域の設定

形式文脈の置かれる「談話記憶」と世界知識や言語知識の置かれる「知識記憶」は以上，述べたとおりである。これに，1 章で論じたアブストラクションを行うための領域を「処理記憶」として付け加える。処理記憶・談話記憶・知識記憶は，加藤. 2006a，2008a などでは「A 領域」「B 領域」「C 領域」などと呼んでいるものにおおむね相当する。

知識記憶にあたる領域は，おおむね認知心理学の記憶モデルでいう「長期記憶」（long-term memory）である。長期記憶に関しては，言語学的な観点からは，以下の点を考えなければならない。

⑼　自伝的記憶・エピソード記憶と意味記憶の違いは，言語学的に見れば，「文脈化されている記憶」と「脱文脈化された記憶」に相当するが，理論的にこのような区分は可能でも，実際の記憶の中でどこまで分離しているかは検討の余地が相当にある。加藤. 2004b では前者を「情報のタグ」を付すことによって示すことを考えている。

⑽　手続き的記憶は，身体性の記憶であるが，言語産出も音声化あるいは文字で書き留めるといったプロセスを行うには，手続き的記憶が関わっていると考えられる[14]。

---

[13] 感覚記憶に相当するプロセスを「処理記憶」の一部として取り込むことも可能だろう。

[14] 例えば，一定の手順を踏むことが手続き的に記憶されているために生じると思われる失

⑾ 意味記憶は，世界を分節化して理解するための記憶とそのネットワークと考えられるが，認知心理学では，言語がなくても成立するものだとされることが多い。しかし，言語学の観点から見れば，世界の分節化には深く言語が関わっており，言語の意味体系と世界の意味体系（＝分節化され，意味化された世界観）は相互作用的な関係にあると考えざるを得ない。

次に「処理記憶」と「談話記憶」は，永続的なものではなく，有期の記憶であることから，「長期記憶」ではないことは容易に確認できるだろう。ただ，認知心理学で言う「短期記憶」と「作動記憶」は，無意味綴りと呼ばれる実在しない文字列などの記憶保持の実験や相互に関係を持たない単語の記憶保持の実験などを通じてその機能と特性が確かめられることからも伺えるように，言語的な意味処理に深く関わったり，その中心的な機構であったりすると見なされることはほとんどないようだ。しかし，文とは語の関係づけを表示した構造性の形式だと言語学では考える。また，発話解釈は，推論を行うことによって世界知識と関連づけることであり，発話と世界を関係づけることだと語用論では考える。長期記憶でなければ，短期記憶と考えたくなるのは自然な二項対立論（dichotomy）であるが，本論が言う「処理記憶」と「談話記憶」は「短期記憶」の下位分類ではなく，短期記憶そのものと等同な概念でもない。強いて言えば，処理記憶のほうが短期記憶との類似性が高いと思われるが，ここでは，誤解と混乱を回避するために，短期記憶（STM）という言い方を用いないことにする。世界知識と言語知識を含む知識記憶のほうは，長期記憶（LTM）の概念とおおむね重なるので，使い続けることに問

行もある。言い慣れている類似した言語形式をそのままあるいは部分的に使ってしまうことを，「自動化」と呼ぶことがあるが，これも別の手続き的記憶を利用してしまう誤りと見ることができるだろう。「数」という漢字をたくさん書かせられると「類」と間違えて書いてしまう誤りが見られることがあるが，これも最初に書く「米」の文字の後の部分がいずれも手続き的に記憶されていると見ると説明しやすい。また，音韻性錯語にも手続き記憶内における干渉が考えられる。

題はなさそうであるが，二項対置そのものを使わないでその一方の極の用語や概念だけを用いることは，やはり，無用な混乱を生みかねないと危惧される。よって，特に必要な例外的場合を除いて，長期記憶という用語も用いないことにしたい。大げさに言えば，これはこれまで筆者が十年以上用いてきたSTMとLTMという概念と用語を，今後の動的心理語用論では用いないという宣言である。

処理記憶（processing memory）は，処理が済むまでの間，知覚したままの「原形の情報やその派生形・処理形」を保持しておくための領域である。言語的なまとまりをなすものを保持するが，一般的な長さで言えば数秒が限度だろう。本論では「処理部門における記憶機構」と考えて「処理記憶」と呼ぶことにしておく[15]。先に示した概要をここでの名称にあわせて整理し直したのが，以下の表である。

	保持時間	文脈種	容量	処理後	共有
処理記憶	有期 おおむね数秒を限界	文脈化以前の状態（言語音から解釈処理終了まで）	限界あり。容量小。	処理後の情報は保持しなくてよい。	せず
談話記憶	有期 おおむね数時間	形式文脈・状況文脈	限界あり。容量大。		する
知識記憶	永続的	世界知識・言語知識	限界なし。	常に更新状態	部分的にする

本論では，これらの記憶領域は，処理記憶から談話記憶へ，談話記憶から知識記憶へ情報が送られるという方向性を考えているが，処理記憶において処理を行うには談話記憶の情報と知識記憶の情報を参照する必要があり，また，談話記憶において推論を行うには知識記憶の情報を参照する必要があることから，全体として相互に双方向性があると考えざるを得ない。なお，談

[15] 以前，加藤はこれを「バッファ記憶」（buffer memory）と呼んでいたが，今後「処理記憶」に統一する。

話記憶と知識記憶では収蔵する文脈の種類が異なるという点で区分することもできる（加藤. 2006a，2006b で論じている）。

談話記憶のうち，「状況文脈」(situational context) とは，セッションの場にある，物理的環境を認識して意味化することによって生じるものである。

3．演繹的文脈の意義

本章では，本論での記憶モデルに応じた文脈の設定を演繹的なものと捉え，従前の帰納的な文脈設定との違いについて述べる。帰納的な文脈では，いわば，事前予測が立てにくい。予測可能性を言語科学の 1 つの条件として立てるのであれば，予測能力を発揮しやすい演繹文脈には相応の意義を認めることができる。

3.1　文脈の演繹的設定

Gazdar. 1979: 130 のように文脈を命題の集合とするのは計算可能な語用論を構築する上での方法論的便宜と考えることができる。Sperber and Wilson. 1982 は，The set of premises used in interpreting an utterance constitutes what is generally known (see Gazdar 1979; Johnson-Laird 1983) as the *context*. と述べているが，記述と分析を行う者は発話解釈に用いられた前提を遡及的にしか規定できないことを考えると，このような文脈は帰納的に定義されるものということになる。

しかし，記憶モデルと結びつけられる文脈は，あらかじめ措定されるものであり，その点で演繹的に定義されると言うことができる。本論の文脈は，演繹的なものだということができる。演繹的に定義される文脈としては以下のように，形式文脈（formal context），状況文脈（situational context），知識文脈（knowledge context）が考えられる[16]。なお，以下で基準点というものは，談話が線条的に展開していく上で想定される基準的な一時点のこと

[16] 加藤. 2004b と区分は同じであるが，名称は同一でない。

である。進行中の談話における「現時点」や，分析対象のセッションに置かれた視点の位置がおおむね基準点に相当する。

Huang. 2007: 13–14 で言う linguistic context が以下の形式文脈におおむね相当し，physical context はおおむね状況文脈に相当するが，本論で言う状況文脈のほうがやや含む範囲が広いであろう。また，situational context は Crystal. 2003[5]: 103–104 が言うように，非言語的な情報を広く一括して指して用いられることがあり，その場合には，セッション参加者の知識や信念なども含むことになるが，本論でいう状況文脈は物理的に存在する外的状況を認識して意味化したもののみを指す。また，Huang. 2007. の言う general knowledge context が以下で言う知識文脈に相当すると言ってよいだろう[17]。

帰納的な文脈がすべて発話の解釈や推論に関わる実体的なものであるのに対して，ここで言う演繹的な文脈は，発話の解釈や推論に関わる可能性があるだけであり，中には実体化されていないものや解釈・推論に利用されないままのものも含んでいる。その意味では，帰納的な文脈が実体的なものであるのに対して，演繹的な文脈は潜在的なものだということができる。

種別	定義
形式文脈	同一セッションの内部で言語的に具体化される発話の連続的な蓄積からなる。狭義には基準点以前に言語化された顕在的な形式文脈を指すが，広義には基準点以後に言語化される潜在的な形式文脈も含む。原則として，セッション参加者が共有していなければならないものであり，命題の形で談話記憶に蓄積できる陳述性の情報である。
状況文脈	セッションの進行と時間的に平行して存在する物理的な状況を認識することで意味化したもの。原則として，セッション参加者が共有可能であり，命題の形にすることができるが，その度合いは一定でない。認識が容易なものは共有度が高く，共有も義務的であるが，容易に認識できないものは共有の義務も低い。例えば，会話の相手が気づいていない（従って認識さ

[17] 筆者は，「世界知識」と言うことが多いが，「百科事典的知識」あるいは「常識」などと呼ばれることもある。

	れず意味化されていない）事物の存在に注意を向けさせることで，共有させることは可能である。また，物理的に知覚されていても，意味化のプロセスを経ていなければ状況文脈には数えない。
知識文脈	セッションが開始する以前から，セッション参加者が持っている知識のうち，言語知識を除外した世界知識にあたるもの。世界知識全体が個人間で完全に一致することはないが，共有度の高いものも少なくない。原則として命題の形で集約されている膨大な知識であるが，あまりにも膨大であるために，すぐに推論に使えるとは限らない。活性化されていないものは，推論に即時的に用いることはできないと考える。ただ，「知識文脈」はセッション参加者がそれぞれ持っており，分析に必要なものをおおむね指して用いることが多い。

これに，形式文脈と知識文脈，また，状況文脈と知識文脈など複数の文脈を利用して，あるいは，知識文脈の内部で，推論を行うことで新たに得られる想定を加えることができる。二次的な文脈（＝派生文脈）と見て，これに加えて，整理すると以下のようになる。

	一次性	文脈種別	活性化の度合い	共有度	線条性制約	収蔵場所	顕在性	メタ性
演繹的文脈	一次文脈	形式文脈	活性化されている	義務的	有	談話記憶	顕在的	メタ的
		状況文脈	おおむね活性化されている	半義務的	無	談話記憶	半潜在的	パラ的
		知識文脈	一部が活性化されているのみ	非義務的	無	知識記憶	潜在的	パラ的
	二次文脈	追加想定	活性化されている	非義務的	無	談話記憶	潜在的	メタ的

先の(8)の例でＢの発話から「Ｂは犬を飼っている」という前提的推論を行った場合，これは「追加想定」として二次的な派生文脈に含めることになる。派生文脈は，知識記憶のように永続的なものではなく，セッション下で生じ

るものなので，談話記憶に収蔵されると考える。

なお，活性化については，以下のようにまとめておくことができる。

【世界知識における活性化】

① 世界知識の情報（情報の断片を含む）には体系性があり，ある情報が活性化されると関係のある情報も活性化される。

② 世界知識の情報の体系性には，共有されないものもあるが，一般的に共有されていると考えられるものも多い。

③ 話し手は，聞き手が活性化できているかどうかを，共有されている（と考えられる）体系性に基づいて推測し，発話で「活性化情報」の標示（marking）を行うことがある。活性化標示が義務的である場合，それが適切に行われないと，発話は不適格もしくは不自然になる。

活性化の度合いは，その文脈の情報の取り出しやすさに関わる。共有度は，話し手と聞き手の間での共有の度合いであるが，義務的であれば共有度は高く，より内容の共通性が高い。しかし，共有している以上一般に可能と見なされる談話処理に失敗すると，《文脈共有義務違反》と見なされる。状況文脈は，五感を通じて知覚可能な物理的状況の理解に基づくが，知覚対象が存在していても文脈情報として取り込むかどうかは，最終的に個々人に委ねられる。また，中には特定の個人にしか知覚や理解が可能でない情報もあり得ることから，現実には共有されないものも存在しうる。

線条性の有無は，解釈などの配列・順序に指定があるかを決定する。談話記憶にあるものは，やりとりのセッション以前には存在せず，セッション終了後は存在が義務にならない。長期記憶にあるものは，どの段階でも存在する情報と見なされる。顕在的な文脈はより共通化・共有度が高まる。

⑿ A_1「なんで，そんなに急いで帰るの？」
B_1「父親が訪ねてくるから，掃除をしないといけないんだ」
A_2「へえ，そりゃ大変だね」

A_1←【Aが急いで帰る様子】が共有され，状況文脈になっている。
B_1 の発話内容→Bには既に確立した情報だが，Aにとっては新規に獲得する情報を含む

①「父親がAの家を訪ねてくる予定であること」
②「部屋の掃除をしなければならないこと」

「①だから②」を因果関係で結ぶためには，「父親の訪問時にきれいな部屋で迎えるべきだ」というBの判断があり，これは一般的な世界知識を参考に推定できる。

また，B_1 は理由を求める疑問文 A_1 に対する回答となる発話であることから，「急いで帰る理由＝①＋②」と解される。これが妥当な推論となるためには，「①＋②」が差し迫った事態でなければならない。妥当な推論であるための必要条件として，「近いうちに父親がAの家を訪ねてくる予定であること」のように①をより限定した情報に更新することになる。

⑬ A_1「なんで，そんなに急いで帰るの？」
B_1「妹が訪ねてくるからケーキでも買っておこうと思って」
A_2「へえ，妹思いのお兄さんなんだね」

⑬の A_1 の発話が状況文脈に基づいているのは⑫と同じである。また，B_1 の発話についても，Aにとって新規となる情報を含む。

①「妹がAの家を訪ねてくる」
②「Aはケーキを買おうと考えている」

また「①だから②」という因果関係が成立する一般的な世界知識は，「訪ねてくる妹をもてなすために，ケーキを用意する」というものであろうが，因果関係の成立に寄与する解釈は「妹におみやげとして持たせるためにケーキ

を用意しておく」など，ほかにもあり得る。また，「急いで帰る理由＝①＋②」が妥当な推論となるために，①は差し迫った事態であることが必要となる。

また，①が成立する以上，「Bには妹がいる」ことが前提的に成立しなければならない。これは，⒀でも「Bには父親がいる」ことが成立しなければならないのと同じであるが，物故しているかどうかは別にして，どの人間にも生物学上の父親がいることは当然なので，新しい情報には通常ならない。しかし，一般に「妹がいる人」と「妹がいない人」がいることから，Aが「Bに妹がいる」ことを知らなければ，新しい情報を得ることになる。

これらは広義の二次文脈に含まれるが，以下のように区分することができる。二次文脈は，世界知識の更新に大きく関わることになる。

⒁ 世界知識の更新と推意・前提

［A］発話の中に含まれる情報が成立する以上，論理的に成立しなければならない情報→自動的に追加される前提（automatically-added presuppositions）

［B］発話の中に含まれる情報が成立する以上，最も単純な推論で得られる，確度の高い情報→解釈のコストが最も低い推意（least-cost implicature）

このほかに Searle. 1969 の言う誠実性条件（sincerity condition）に相当する「BはAが急いで帰る理由を知らない」という状況が成立していなければならない。質問は，相手の知識状態を試すのでない限り，「知らないから尋ねる」という事前状態が誠実さをなす条件となるからである。

⒂ 【禁帯出の本を指して】A「この本，借りられますか」

B「借りられると思いますか？」

Bの発話は誠実性条件にわざと違反している。それによって，A自身が「この本が借りられるかどうか」分からないはずはなく，「借りられないのは明ら

かだ」と推論することで，Aの質問じたいを無化し，撤回することを促している。これは，情報を提示してもAに受容される保証がなく，A自身が推論計算した結果として得られた情報ならばより確実に受容が見込まれることにもよる。

3.2 文脈と記憶モデル

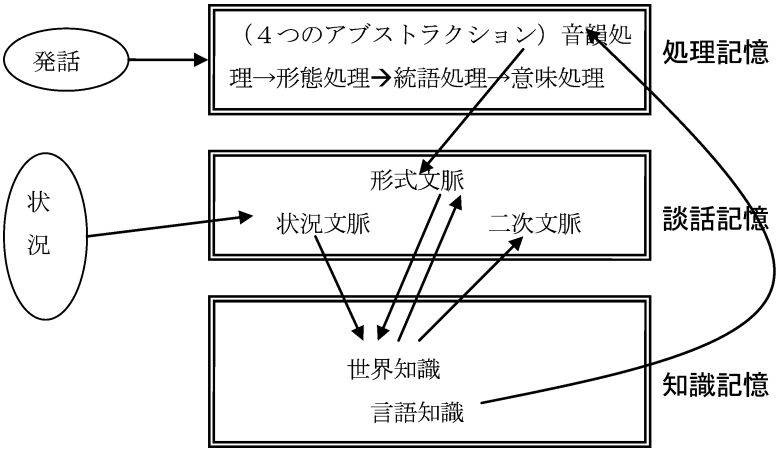
発話の文理解が行われるのが処理記憶であり，談話記憶は一定のあいだ保持する領域ではあるが，セッションとともに失われうるという点でいずれも永続性はない。また，これらの文脈が相互に作用して二次的な文脈を生み出しているという点は，帰納的な文脈に比べて動的であり，線条的な特性を考えるのにより適していると思われる。知識記憶のなかの世界知識(知識文脈)がセッションにおいて不断に更新され続けるという点も動的なとらえ方だと言えるだろう。

ただし，談話記憶の活性化については，一律に active ないし activated と考えるべきではない面もある。形式文脈については，共有義務の原則があるが，セッションが数時間続く場合（長い時間のおしゃべりや長時間の会議など）では，最初のあたりの内容（＝形式文脈）を数時間後には忘れかけていることはありうる。それは，共有義務の原則には違反するが，談話記憶の情報量が膨大になれば，それに応じて検索が難しくなることは双方とも了解しているはずなので，semi-active（半活性的）という概念を導入するほうが，実態に即しているとも思われる。現に，Chafe. 1994 では，異なる枠組みであるが，活性性について 3 つの種別を導入している。ここでは，談話記憶は一律に活性的とせず，半活性を導入し，同じレベルの状況が知識記憶にも適応可能なことから，以下のように整理し直しておく。活性度は連続的だと考えられるが，細部は，今後検討して掘り下げたい。

⑯ 談話記憶→活性的なものと半活性的なものからなる（活性的であることが無標）
知識記憶→活性的なもの・半活性的なもの・未活性のものからなる

（未活性であることが無標）

最後に，それぞれの記憶領域における文脈の相互関係を簡単に図示すると以下のようになる。



４．残された課題

動的な文脈を想定して記述することには，メリットだけでなくデメリットもある。細かな記述が増え過ぎて全体がわかりにくくなってしまう可能性があること，無駄な記述が増えてコストパフォーマンスの悪い研究になりかねないこと，相互作用を逐一記述していくと変更が多すぎて混乱してしまうかもしれないこと，などがデメリットとして考えられる。

このうち二次文脈がどんどん追加されて談話文脈が柔軟に変化していくにも関わらず，解釈者がそれほど混乱しているという自覚がないということについては，世界知識との整合性などが制約になっている可能性を考えたい。例えば，解釈においては，アブストラクションの手順を厳密に踏んで論理的

な出力形を得ることよりも，世界知識の整合性を大きく壊さないことのほうが優先されるとも考えられる。例えば，「太郎のヤツ，遅いな」というのに対して，「彼女に刺されちゃったんじゃないか」が冗談として認識され，「中央線，また，遅れてるんじゃないの？」が妥当性のある推論（即ち，冗談ではない）と認識されるのは，世界知識において事態発生の蓋然性を評価しているとも言えるが，世界知識における整合性が崩されると知的負担が大きく，そのような解釈を回避しているとも考えられるのである。このことは，人間とは，一般に知的な怠け者であり，世界知識に大きな変更を来す解釈を避けたがる，とでも言うことができる。

また，日本語では，知識記憶内にすでに収蔵済みの情報を検索したことを示す標識が多い。例えば，「確か，明日の午後，会議があったな」「あいつがあんなことを言うから…」などのタ形（加藤. 2004a，2009a）やア系指示詞がそうであるが，これらがモダリティと関わっている可能性についても検討したい。

参考文献

浮田潤・賀集寛.（編）1997.『言語と記憶』培風館
苧阪満里子. 2002.『ワーキングメモリー』新曜社
加藤重広. 2001a.「照応現象としてみた接続」『富山大学人文学部紀要』34　pp. 47–78
————. 2001b.「談話標識の機能について」『東京大学言語学論集』20（湯川恭敏教授定年記念号）東京大学言語学研究室　pp. 121–138
————. 2003.『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
————. 2004a.「長期記憶情報参照をマークするタ形の用法について」2004 年 3 月　現代日本語意味論・文法論研究会発表資料（名古屋大学）
————. 2004b.『日本語語用論のしくみ』研究社（町田健編）
————. 2006a.「線条性の再検討」『言語基礎論の構築の構築へ向けて（東京外国語大学 AA 研共同研究プロジェクト報告書）』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，pp. 1–25
————. 2006b.「語用論の／という基本的問題」『言語基礎論の構築へ向けて（東京外国語大学 AA 研共同研究プロジェクト報告書）』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，pp. 169–190

————. 2008a.「文脈とはどのようなものか」『科学研究費補助金・基盤研究（C）・研究報告書（平成 17〜19 年度）（17520254）日本語受動構文の構造的意味と推意に関する語用論的原理の記述的研究』pp. 45-58

————. 2008b.「記憶モデルと動的文脈の枠組み」『日本語用論学会第 10 回大会発表論文集』第 3 号，2008 年 11 月　pp. 363-366

————. 2009a.「タ形の長期記憶参照標識機能」『北海道大学大学院文学研究科紀要』127 号，pp. 1-27

————. 2009b.「語用論から認知言語学を見る」『JCLA Proceedings(認知言語学会発表論文集)』 9，日本認知言語学会（印刷中）

田中康文・橋本律夫. 1999.「エピソード記憶」浅井昌弘編『臨床精神医学講座Ｓ 2　記憶の臨床』中山書店，pp. 75-87

中條和光. 2001.「文の理解」森敏昭（編）『認知心理学を語る　おもしろ言語のラボラトリー』北大路書房

村井俊哉・濱中淑彦. 1999.「意味記憶」浅井昌弘（編）『臨床精神医学講座Ｓ 2　記憶の臨床』中山書店，pp. 101-112

山下光. 1999.「作動記憶」浅井昌弘（編）『臨床精神医学講座Ｓ 2　記憶の臨床』中山書店，pp. 61-74

吉益晴夫. 1999.「自伝的記憶（遠隔記憶）」浅井昌弘（編）『臨床精神医学講座Ｓ 2　記憶の臨床』中山書店，pp. 88-100

Anderson, John R. 1980. *Cognitive psychology and its implications*, San Francisco: Freeman and Company

Atkinson, R. C. and Schifrin, R. M. 1968. “Human memory: a proposed system and its control process,” in K. W. Spence and J. T. Spence (eds.) *The psychology of learning and motivation*, Vol. 2, Academic Press

Atkinson, R. C. and Schifrin, R. M. 1971. “The control of short-term memory,” *Scientific American* **225**, pp. 82-90

Chafe, Wallace. 1994. *Discourse, consciousness, and time*, Chicago: The University of Chicago Press

Crystal, David. 2003[5]. *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*, Cambridge: Blackwell

Eysenck, Michael W. 1986. “Working Memory,” in Cohen, G, Eysenck M. W. and LeVoi M. E. (eds.) *Memory: A cognitive approach*, The Open University, UK

Gazdar, Gerald. 1979. *Pragmatics — implicature, presupposition, and logical form —*, London; Academic Press

Huang, Yan. 2007. *Pragmatics*, Oxford: Oxford University Press

James, William. 1890. *The principles of psychology*, (2 volumes) New York: Henry Holt

Johnson-Laird, Philip N. 1983. *Mental models: towards a cognitive science of language, inference, and consciousness*, Cambridge University Press

Kempson, Ruth *et al.* 2001. *Dynamic Syntax, The Flow of Language Understanding*, Oxford Blackwell

Salamé, Pierre and Baddeley, Alan. 1982. "Disruption of short-term memory by unattended speech: Implications for the structure of working memory," *Journal of Verbal and Learning Verbal Behavior*, **21**, pp. 150–164

Searle, John R. 1969. *Speech Acts: An essay in philosophy of language*, Cambridge: Cambridge University Press

Sperber, Dan and Wilson, Deirdre. 1982. "Mutual knowledge and Relevance in Theories of Communication" in *Mutual Knowledge*, Smith, N. V. (ed.) London: Academic Press

Wilson, Robert. A. and Keil, Frank C. (eds.). 1999. *The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences*, Cambridge (Mass): The MIT Press